キトラ古墳の玄武

1983年、３万画素のファイバースコープでとらえられ、キトラ古墳壁画発見の発端となった玄武です。2005年11月に保存修復のため石室北壁から取り外されましたが、2007年５月11日から27日に飛鳥資料館で特別公開されます。

西壁側にすすむ亀に蛇が巻き付き、甲羅の上で振り返る亀と蛇がにらみあいます。蛇は亀の体を斜めにひと巻きして、頭側と尻尾側を大きくそり上げるとともに、尻尾でつくったループに頭を通し、環状を呈しています。亀には耳がついています。この構図の玄武は、東晋隆安２年（398）の江蘇省鎮江畜牧場二七大隊墓の壁画あたりに祖形を求められそうです。大陸では類例が少ないのに対し、高松塚壁画、薬師寺金堂薬師如来坐像台座、正倉院十二支八卦背円鏡など、飛鳥～奈良時代の日本に類例が多いのも特徴です。幅23cm×高さ14cm。（写真下は原寸大）

（飛鳥資料館　加藤 真二）